

レジデンス・イン・森下スタジオ ヴィジティング・フェロー

イム・ジエ パブリック・トーク

「身体のアークイブ：日本と韓国の伝統とコンテンポラリーダンスの実験」

□ 開催日時：2014年6月19日(木) 19:00-20:30 □ 開催場所：森下スタジオ

本パブリック・トークでは、「身体のアークイブ：日本と韓国の伝統とコンテンポラリーダンスの実験」と題し、日本と韓国の伝統とコンテンポラリーの関係から見た文化的なアイデンティティの共通性や相違性を考察するリサーチ・プロジェクトのアイデアや、そのアイデアの背景にある韓国の伝統舞踊やダンスの歴史について、事例を交えながらプレゼンテーションしていただいた。

モデレーター：

まず始めに、ご自身の自己紹介をお願いいたします。

イム・ジエ：

私は元々、韓国の伝統舞踊に取り組んでいました。10歳から始め、大学でも伝統舞踊を学び、韓国の伝統舞踊のカンパニーで6年、そして、コンテンポラリーダンスのカンパニーで6年、活動をしていました。12年間、カンパニーでダンサーとして踊ってきたのですが、振付にも興味を持ち、伝統舞踊に現代的な感覚を盛り込む作品をつくり始めました。そして、振付の勉強をしようと思い、ベルリンの大学に2年間留学をしました。昨年、その勉強を終えて、その後、ハンブルクのK3のレジデンスに8ヶ月間、滞在しました。

現在、3部作の作品をつくっていて、第1部をハンブルクで、第2部を釜山で制作しました。そして、第3部を東京で制作するつもりです。ドイツ、韓国、日本のアーティストが、共同で作品をつくる試みで、その3部作をフェスティバル/トーキョー14で上演する予定です。

モデレーター：

「身体のアークイブ：日本と韓国のコンテンポラリーダンスの実験」というタイトルで、日本と韓国の文化的アイデンティティの共通点や相違性についてリサーチをするということですが、そのリサーチプロジェクトについて具体的に説明をいただけますでしょうか？

イム・ジエ：

このリサーチはダンスにおける伝統と歴史というアイデアに基づいています。これまでに受けてきたダンス教育の中で、様々なダンスの代表的な動作や考え方、そして、身体概念を体得してきました。そこで、伝統舞踊、モダンダンス、コンテンポラリーダンスが混在する私の身体を再考していくことで、振付のボキャブラリーを探すことに興味を持ちました。

私は自身の身体を、動くアークイブ、変化し続けるアークイブだと捉えています。なぜなら、私の身体には記憶の断片が詰まっていると思うからです。また、様々なダンスの美学に依拠した身体断片が、私の身体を構成しているとも考えています。

そこで、私はいくつかの問いを立てました。その問いを自分に対して問いかけると同時に、私とは背景が異なるダンサーにも問いかけ、何が起きるのかを考察しています。

今回のリサーチでは、その協力者として、振子びじんさんをお招きしたいと考えています。そして、二人でいくつかの問いを共有し、共同作業をすることで、ダンス作品を創作するためのツールを探したいと思います。

まずは、ダンスの歴史を振り返ることから始めたいと思います。ダンスの歴史を辿って行く中で、私たちのダンスがダンスの歴史でどの時代のダンスに影響を受けているのかを考えていきたいからです。

例えば、モダンダンスは欧米からの影響ですが、それは日本を通じて韓国に入ってきました。それは、日本というフィルターを通して、韓国にモダンダンスがもたらされたということですが、ダンスにおける歴史的な繋がりを考えていくことができると思います。また、日本の舞踏が、西洋のダンスからどのような影響を受け、どのようにして新しい領域を切り開いたのかを考えたいとも思います。

その中で日本と韓国のダンスの違いを明らかにするだけでなく、類似点も見出したいと思います。例えば、私が舞踏を習って、私が振子さんに舞踏を教える、逆に、振子さんが韓国の伝統舞踊を習って、その伝統舞踊を私に教えるといったことを試してみようと考えています。



パブリック・トークの会場

このように教え合い、学び合うことで、お互いの身体に介入し、そのプロセスを経ることによって、他者のダンスを振り返り、自分の身体を客観視することができるのではないかと考えています。

まずは、先程もお話したように、ダンスの歴史、あるいはダンスの中にある歴史を議論し、「今」という現在を定義したいと思います。さらには、2089年という未来でダンスがどうなっているのかを考えていくつもりです。それは、単に歴史を時代順に追ってだけでなく、過去の歴史を再構築し、再発見することにもなると思います。例えば、過去にこんなアーティストがいて、こういうアートの考え方を作り出したということをフィクションに見立てることで、過去をつくり変えることを考えています。

歴史を参照していくことから始まりますが、それは事実とフィクションを融合していくことで、新しいダンスを創造したいと思います。

モデレーター：

お話の中で日本と韓国のダンスの歴史についてリサーチをし、また、伝統舞踊に触れていくということでしたが、イム・ジエさんが習ってきた韓国の伝統舞踊はどのようなものなのでしょうか？

イム・ジエ：

韓国では伝統舞踊と一口に言われることもありますが、様々なものがあります。私が習ってきた伝統舞踊を中心に話したいと思いますが、まずは新舞踊です。

韓国の新舞踊は崔承喜(サイ・ショウキ)が打ち出した舞踊です。そのスタイルは金白峰(キム・ベクポン)に受け継がれました。崔承喜の最後の生徒であったのが金白峰で、私が勉強した慶熙大学で教鞭をとっていました。このダンスはバレエとモダンダンスを融合したスタイルで、上半身はバレエで、下半身は韓国の伝統舞踊という特徴があります。かたちの美しさを目指し、女性的でダイナミックな舞踊です。

その後、韓国創作舞踊が始まりました。私はこのダンスも学びましたが、伝統舞踊で履いていた靴を脱ぎ、裸足で踊る、そして、足が外に開いたポジションをとることが特徴です。作家性が強く、呼吸の使い方を非常に意識しています。その呼吸方法は理論化されていませんが、Sの字や8の字の構造を持っていると分析されています。Sの字も8の字も循環構造になっているので、始まりと終わりがなく、ずっと続いていく呼吸方法です。漢字を書くようだと言っている人もいます。

それから、伝統民俗舞踊です。新舞踊や韓国創作舞踊では筋肉を使って踊るのですが、伝統民俗舞踊は骨で踊ります。「静、中、動」と言われていますが、静かに立って動いていないときでも動いているという考えを基本としています。力を使って美しく表現するのではなく、ただそこに身体があって瞑想的なものです。バレエでは様々な用語が用いられて

いますが、韓国の伝統舞踊には用語がないので、口三味線的に習います。例えば、自然にあるものを指して、「鳥を手を持つように」とか、「風が頬を撫でる」とか、詩的な言葉で動きを説明していくのが、一般的です。

モデレーター：

伝統舞踊を学び、伝統舞踊のダンサーとして活動し、それから、現在、コンテンポラリーダンスの中で作品を創作されていますが、これまでに振付した作品についてお話をいただけますでしょうか？

イム・ジエ：

それでは、作品のビデオをお見せする前に、私がダンスの中で考えてきた問いをご紹介しますと思います。

私の振付は芸術的な問いから生まれています。それは伝統に対する抵抗の中から湧き上がってきたものでもあります。私にとって伝統は足枷のようなもので、それを押しのけなければ先には進めないものと捉えています。伝統では過去を美化している傾向があると思います。

○伝統は誰に帰属するのか。または、伝統の遺産に帰属するのか。それとも、それを演じている人に帰属するのか。あるいは、それを見ている人に帰属するのか。

○この身体は誰に属するのか。(伝統舞踊では、その制度に従う必要があるため、個性や創造性が不要なく、自分の身体は誰のものなのかと感じていました)

○どのように韓国の伝統舞踊を継承することができるのか。過去の産物としてではなく、伝統をつくる、それを踊る主体となることができるのか。

○伝統を継承する人は伝統を象徴し、また、その象徴を破壊することを両立することができるのか。

○伝統的な価値観を超えた新しい価値観をどのようにつくることができるのか、また、伝統に縛られることなく、自分の価値観をどのようにつくっていくことができるのか。

○伝統を継承する上で個性の欠如をどのように問題視することができるのか。



イム・ジエ

○どのようにして自分の身体を制度から解放することができるのか。

○何も知らずに受け入れるのではなくて、自分のロジックをつくりあげながら、自分の身体に何が起きているのかをどのように意識することができるのか。

○自分にとって現代的な身体というのは、どのような意味を持つのか。

○現代における今現在の身体というのは、伝統という観念に帰属しないのか。

○私の身体は歴史的資料の表象ではないのか。

○私の身体は過去の情報を同じように体現しているのか。

○私の身体は主体的であり、自分の動機によって突き動かされているのだろうか。

○私の身体は特定の訓練の中で、主体と客体を切り替えることができるのだろうか。

○伝統の権威は個人の身体をどのように操作し、支配しているのか。

○私の身体はイデオロギーや美学によってどのようにかたちづくられているのだろうか。

○私の身体は伝統における制度化された基準や観念からどのように抜け出しているのだろうか。

これらの問いを具体的に身体的な動きやダンスへと構築していくために、いくつかの戦略を考えています。それは、重複させること、象徴させること、逸脱させること、介入させること、融合させること、宙づりにさせること、到達しないこと、他の方向に進むこと、自分の身体をエコーさせること、輪郭をつくること、ミラーリングすること、真似することです。

それでは、これらの問いを実践したものをお見せしたいと思います。

まずは韓国伝統舞踊のトレーニングの一つです。私はこれを毎日、20年間続けています。私の身体に染み付いた動きから、どのように抜け出すことができるのかを実験しています。



『Life Once More』(2012)

次は、修士課程でのワーク・イン・プログレスですが、表象と繰り返しがキーワードで、今、私がやっているこの動きが過去に起きたことを表現しているものなのか、それとも、現在、起きていることを表現しているのかという問いをもとにしています。それは非常に大きな問いであるため、それを絞る試みとして一つの動きに着目し、いろいろなダンスのスタイルで実践してみました。私がそれを実践している間に、その映像が後ろに投影されるという作品です。(写真左下)

次の作品では、伝統というのは今どのように見えているのかという問いをもとにしています。例えば、街の中で伝統的なものを目にした場合に、今の様子とそぐわない、奇妙な感じがすると思います。過去の伝統的なイメージを異なるコンテキストの中に置いた作品です。

次は写真作品ですが、ベルリンの学校に行く途中の鏡の前で、6ヶ月間写真を撮り続けて、それらを貼り合わせたものです。身体をアーカイブとして考える「Body Archive」というコンセプトに関係し、私の中にある記憶の断片、様々なダンスの断片が私の身体の中に詰まっていることを表しています。それらの断片は融合しているものもあれば、対立しているものもあります。そういったことを考えて作品をつくりました。(写真右下)

それから、2年前に東京に来たときに、2日間、日本舞踊を習う機会がありましたが、私の習った伝統舞踊との類似点と違いに気がつきました。例えば、類似点としては、ダンスの教え方で、自然にあるものに例えて教えるということです。例えば、山。山になるというのが踊りの動きの教え方であったりします。一方で、韓国の新舞踊は上半身がバレエで、下半身が伝統舞踊でした。

コンテンポラリーダンスは物語やその意味をつくることを拒絶することが多いですが、伝統舞踊の場合、特定の動作に関連する物語やリズムがあります。伝統舞踊について様々な実験をするプロセスで、私は自分自身を客観視するために、自分を他人だと思わなければいけないと思いました。普段とは違う方法で日常的な行為を実践してみました。例えば、自分の家に帰るという行為です。



『Recomposing three tense - past, present and future』(2012)

次は伝統と現代というテーマで、ルーマニア出身のダンサーと共同作業をした作品です。彼はバレエ出身で、私と同じように自分の背景にあるダンスに疑問を持っていました。そして、逸脱を題材に稽古をしました。自分たちを縛っているものから、どうやって逸脱して他の可能性を見つけることができるのかということです。スタジオの中で逸脱している物の写真を集めて、逸脱というのはどういうものなのかと考えることにしました。それはそのものに期待されている機能を満たしていないものでした。

この作品では、どうやったら自分の限界を押し広げることができるのかという問いがあったのですが、その答えとして、限界とは押し広げられるものなので、限界はないことが分かりました。

モデレーター：

リサーチプロジェクトで、1870年代、1920年代、1990年代等とありますが、なぜ、その年代を取り上げているのかをご説明いただけますでしょうか？

イム・ジエ：

それらの年代は具体的ではなく、抽象的な年代です。私は伝統舞踊、新舞踊、創作舞踊、モダンダンス、コンテンポラリーダンスを学び、それらを機械のように叩き込まれてきましたが、それらのダンスがどの時代に由来するのかを考えてみることにしました。

「1870年代」は19世紀ということですが、ダンスが舞台の上で演じられる前の時代です。「1920年代」は新舞踊です。1926年に石井漠が韓国で初めてモダンダンスを上演しました。その公演を見た崔承喜が日本に行き、モダンダンスを石井漠のもとで学びました。1930年代に韓国に戻り、その後、公演を行いました。つまり、1920年代、1930年代、1940年代を含みます。「1990年代」は70年代から90年代についてですが、韓国創作舞踊が立ち上がった時期です。その時期に、韓国の大学でダンスの舞踊学科が創設され、ダンスが制度化された時代です。政治的な権力が舞踊に影響をもたらした時代です。個人レベルで活動していたダンサーは、規模の大きいカンパニーには敵わず、助成金を獲得することができないという問題がありました。「2014年」は今ですが、いろいろな年代を追跡することで、2089年という未来を見通そうと考えています。

(以下、質疑応答略)

## ヴィジティング・フェロー 滞在概要

イム・ジエ(韓国) 振付家・ダンサー

2014年6月15日(日)ー8月4日(月) 滞在

テーマ：身体のアーカイブ：日本と韓国の伝統とコンテンポラリーダンスの実験

内容：日本の伝統とコンテンポラリーダンスに精通するアーティストとの関係性を築くために、日本と韓国の文化的なアイデンティティの共通性や相違性についてリサーチを行った。滞在中、舞踏家にインタビューを行い、振付家・ダンサーの振子びじんと共同制作を通して、コンテンポラリーダンスが何に影響を受け、また、過去や現在のコンテンポラリーダンスが将来どのように影響力を持つかを考察した。

### [滞在中の展開]

2014年11月、フェスティバル／トーキョーで、振子びじんと共同制作作品『1分の中の10年』を発表。また、2015年10月、デンマークのフェスティバルで、同作品を発表予定。



韓国の慶熙大学校で伝統舞踊を専攻。2013年、ドイツのベルリン芸術大学(UdK)、Inter-University Centre for Dance Berlin(HZT)にて、Solo / Dance / Authorshipの修士課程を修了。2013-14年、K3 タンツプラン・ハンブルクのレジデンシー・アーティスト。

韓国の伝統舞踊の技能を体得し、現代の感覚と伝統舞踊の融合を試みる作品を創作。2011年に初演のソロ作品『Raw Material』は韓国、ドイツ、ベルギー、ブルガリアで上演。2012年のフェスティバル／トーキョーでは、ファン・スヒョンと結成したCo-Labプロジェクト・グループとして『Co-Lab：ソウル・ベルリン』を発表。2013年に韓国で初演の『New Monster』は、ドイツのタンツターゲ・ベルリン2014に招待された。